



『万葉集』編纂後、大伴家持が 歌を詠まなくなった理由とは!?

日本最古の和歌集『万葉集』の編纂に関わり、奈良時代を代表する歌人の一人として知られている大伴家持。『万葉集』の最後に収録されている彼の歌「新しき年の始めの初春の今日降る雪のいやしけ吉事」は、和歌集をしめくるる歌というだけでなく、家持にとって最後に詠んだ歌でもあった。

この歌は、家持が因幡守に任じられた翌年、天平宝字3年(759)正月に詠んだものとされている。この後、家持は26年も生きるのだが、歌は1つも残されていない。それはなぜなのだろうか。

歌人としての一面が取り上げられる家持だが、その出自である大伴家はヤマト王権以来の武門を司る家柄だった。祖父の安麻呂、父の旅人は大宰帥を務め、家持も天平勝宝6年(754)には兵部少輔となっ

て防人の事務を担当している。実は、家持が歌をよく詠んだのはこの軍人時代のこと、『万葉集』を編纂したのもこの頃だった。

しかし、天平宝字元年(757)、家持の人生を暗転させる事件が起こる。橘奈良麻呂が藤原仲麻呂を滅ぼして孝謙天皇を廃そうとした「橘奈良麻呂の乱」が起こり、首謀者の奈良麻呂に連座して、大伴一族の池主、古麻呂らが処罰された。家持も失脚し、中央政界から因幡

守へと追われてしまう。冒頭の歌を詠んだのも、ここ因幡の地だった。

その後家持は、有力貴族間の政治闘争に巻き込まれていった。天平宝字7年(763)には、藤原仲麻呂暗殺未遂の罪で捕えられ薩摩守へ左遷、天応2年(782)



小倉百人一首にも中納言家持として歌が選ばれている大伴家持(『三十六歌仙額』狩野探幽画)

大宰師
九州諸国を統轄した大宰府の長官。

防人
律令制のもと、北九州地方の防衛にあたった兵士。主に東国から徴用された。大宰府に送られ、3年交替で任務に就いた。

藤原仲麻呂
(706-764)
藤原不比等の孫。光明皇太后の信任を得て、異例ともいえるスピードで出世し、758年に惠美押勝(えみのおしかつ)の名を受ける。皇族以外で初めて太師(太政大臣)に任ぜられ、専横を振るった。孝謙上皇が道鏡を寵愛すると、その排除を画策して反乱を起こしたが失敗し、敗死した。